

絹本著色恵日寺絵図の歴史地理的考察

安田初雄*

はしがき

この絹本著色恵日寺絵図は、福島県耶麻郡磐梯町字本寺上4950番地の恵日寺所有で、昭和15年(1940)2月23日付で國の重要美術品に認定され、現在会津若松市にある福島県立博物館に寄託されている。この絵図はこれまで鎌倉末期から室町時代初期までに作成されたと見られてきた古絵図で、この地方の中世初期の様子を示す数少ない史料の一つとして貴重である。但、古い絵図のため損傷が甚だしく、顔料は一部剝離し、注記で判読が不能の箇所もある。作成年代の記載がないので、これを資料として活用するためには、推定しうる作成年代の幅を、出来るだけ短く詰める必要があり、また摩滅した注記の補足もしなければならない。それらの検討に備えて、2-3の問題をとりあげるのが、本稿の主たる目的である。

I 恵日寺と恵日寺絵図との名称について

奥州会津磐梯山恵日寺は、大同2年(807)徳一の創設で、初この寺は清水寺と呼ばれたという。すなわち寛文5年(1665)作の恵日寺縁起^①に徳一の歌として、「恵牟阿羅波和禮末多古武與以波波之農也末乃不毛土能幾與美豆乃天羅」とあり、「幾與美豆乃天羅」すなわち「きよみずのてら」である。耶麻郡大寺村の地志編集^②では「せい水寺」とする。この寺は慧日寺で後年恵日寺と表記するようになると変わる。この寺の25世慶有筆の紙本墨書田植歌(福島県重文)には、建長元年(1275)恵日寺とある。

慧日寺と恵日寺 この恵日寺は11世紀初頭までは、慧日寺と表記されていた。それは大同年中(806~809)の傳平城天皇銅印の「慧日」、弘仁年中(810~815)の嵯峨天皇銅印の「慧日寺之印」^③で明瞭である。かくて昭和40年12月國史跡指定で「史跡慧日寺跡」とされ、磐梯町大字磐梯字村西に建てられた資料館が、「磐梯山慧日寺資料館」と命名されている。

恵日寺寺宝の一つの鉄鉢(國重美)の銘に、「永享七年乙卯八月 慧日寺金堂鉢」(福島県史7で恵日寺とするのは誤記)とあるが、金石文であるため、1435年に古い表記を敢えて使用したと見るべきであろう。というのは恵日寺の表記が11世紀中頃以降続いているからである。例えば恵日寺藏の永承2年丁亥(1047、但永喜とあるが、永喜の年号はないから永承と解されている)の大黒印板の裏に、「磐梯山恵日寺」とあり(新編会津風土記、以下新記と略記する)、仁平4年(1154)の「恵日寺有請雨経」(会津旧事雑考)^④、承安2年(1172)の「小川庄七十五村城氏より恵日寺に寄附」(異本塔寺長帳)^⑤、12世紀成立とされる今昔物語集の「陸奥國ニ恵日寺ト云フ寺有」の記事、承久3年(1221)の「恵日寺有獅子繡書」(旧事雑考)、永仁3年(1294)の「恵日寺勸請祝詞奥書」(前同書)、觀應元年(1350)の「恵日寺薬師再興」(異本塔寺長帳)、應安4年(1371)4月4日「恵日寺塔供養」(旧事雑考)、應永25年(1418)の「恵日寺炎上」(異本塔寺長帳)などの用例が示す如く、みな恵(恵)日寺と表記し、慧日寺の用例は永承以降明治初年までさきあげた金石文以外にはない。かくしてこの絵図が作成された時代には、この寺は恵日寺でなく、恵日寺と表記していた。ちなみに

* 本学元教官 福島市桜木町11-18

新記を含む旧記では、みな旧字体の恵を使用しているが、恵とは字体の相違にすぎない。尤も慧も知慧・知恵と入れかわる故、慧日としても意味の上では余り差はないのであろう。永正8年(1511)この絵図修復のうちに「大同年中恵日寺建立」とするのは、高野山の僧の記事で、大同年中の創建だから慧日寺であろうが、ここでは永正年中の恵日寺が、大同年中の創建だというのであろう。

恵日寺絵図の近世の呼称 この絵図の中世における呼称は不明であるが、近世にはこの絵図を紹介した著述が幾つかある。その最も古いものは会津旧事雑考であろう。この雑考では後述する如く、この絵図の主として社殿・仏堂及びその遺跡名の注記を列挙して、「以上每字爲図相傳有塔頭者 點小圈 記其数而已(此図永正中成也)」とする。すなわち單に図と記載しているが、恵日寺図であろう。それはこの雑考の著者向井新兵衛が編纂に参加しているという寛文6年の会津風土記⁽⁶⁾でも、

この絵図を「恵日寺図」と記載している故である。向井はその著会津四家合考で、この絵図を解説し、「此他事跡 詳見干官府風土記」としている。官府風土記は勿論寛文の会津風土記である。さきの括弧内の永正中成也の見解は、文化6年(1809)の会津藩編纂新編会津風土記にも継承され、恵日寺が「永正の頃までは、猶宏基巨構にして、院宇も多かりしと見え、其図今に残れり」と記述し、同絵図の模写略図を掲げて、「永正古図」と題名までつけている(新記)。

しかるにこの恵日寺絵図には、次に示す如き修理銘があつて、永正8年(1511)高野山金剛峰寺にたのんで修復された絵図であることは疑いない。もっともこの修理銘は、嘉永3年(1850)会津藩主松平容敬が恵日寺を訪ねる時に、またまた補修をして書き直したのであろうが、これまでの修理銘を忠実に写し取ったと思われる。それは永正の修理銘に奥州会津耶麻郡尾寺邑、また恵日寺

を恵日寺とし、遍照光院大僧都寛尊と高野山の僧都名を記すなど、古い文言のままとみられるからである。それ故これは永正古図ではなく、「永正修復古図」である(写真1参照)。

正徳6年(1716)の実質記録⁽⁸⁾によると、この絵図は「當山新古絵図二紙」の内の當山古絵図で、地志扁集では「当山往古図」とし、新記では「當寺永正古図 一幅、其図如左」として、1頁大の前記永正古図を掲げている。地志扁集の往古図は、元禄の磐梯山金剛院恵日絵図の新絵図に対して、古い絵図であるとの意と解すべきで、昔の

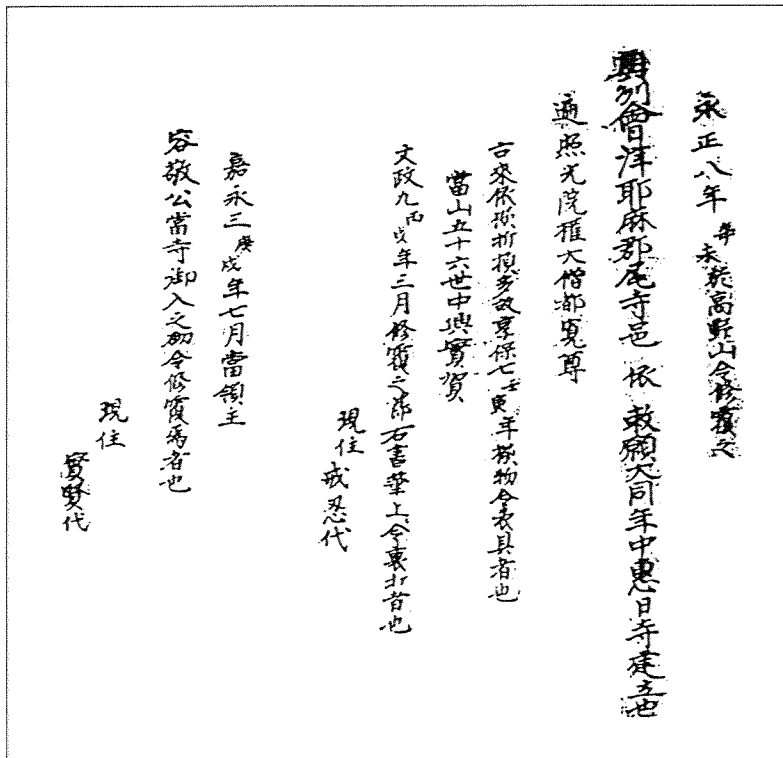


写真1 絹本著色恵日寺絵図の裏押紙修理銘

様子を復元して図示した往古図ではない。

曼荼羅説の否定 この永正修復の恵日寺絵図を曼荼羅とみた人もあるが⁽⁹⁾、そうではないだろう。というのはこの絵図は古地図で、絵画ではないからである。瞥見すると絵画的表現が目立っているから、絵画と見違える人もあるのであろうが、絵の様に見えるのは、山々や社殿だけである。それは確かに鳥瞰図式に描写されている。しかしこの絵図の主体をなす仏堂は、正面図であって鳥瞰図ではない。しかも講堂は東向きの正面図である(写真2)。また多数ある仏堂の遺跡は、道路及び河川とともに、平面図として図示されている。すなわち地物を記号化して、土地の様子を示している。したがってこれは絵画ではなく、古地図である。現代の地図も地物を図式化した記号を使用している。絵図ではその記号がより具体的で、あまり抽象化されていない点で差があるだけである。こうしてこの絵図は一部の人がいう如き曼荼羅ではなく、恵日寺絵図と呼ばれる絵図である。

II 境域図としての恵日寺絵図

古地図(絵図)の研究者である栗田元次(元広島文理大教授)は、その著『古版地図集成』⁽¹⁰⁾で日本の明治以前の古地図を、世界図・日本總図・國郡図・境域図などの13種に分類した。この内境域図は「寺社・城郭・殿舎・庭園等の境内や、遊郭・居留地等の特殊の地域の図」であるとする。その目立った特色は、絵画的傾向が著しいことで、鎌倉・室町時代の寺社境内図の現存するものが頗る多いと述べている。

この恵日寺絵図は、境域図の類型に属する典型であろう。この絵図では恵日寺境内の仏堂及び社殿は、その配置がかなり正確に図示され、色彩も鮮やかである。しかしその周辺は、北は小城峰・磐梯山、南は日橋川以南に及び、東は湯達沢・翁島おきなから、西は赤枝西方にまで及ぶ範囲を含むので、周縁の歪は大きい。この特色も多くの境域図と共通している。それが絵画的であるとしても、絵画そのものでないことは、前述の通りである。境域図の中には、室町時代の作とされる大宰府観世音

寺絵図⁽¹¹⁾の如く、全部鳥瞰図式に表示された絵図もあるが、恵日寺絵図はそうではなく、大部分が正面図か、平面図として図示されている。

元来地図は地表の様子を示すのに、ある観点から諸地物を取捨選択して、記号を使用して平面上に図示したものである。絵図は日本の明治以前の古地図で、明治7年(1874)の耕地絵図の例が示すように、その頃まで公的に絵図の名称が使用されていた。

この恵日寺絵図では多数ある仏堂の遺跡が、その礎石の配置を示す如くに、小圈を規則正しく並べて図示している。これは現在史跡・名勝・天然記念物の所在を示す三つの黒点、すなわち正三角形の三頂点に配置した形の三つの黒点の原型であろう。道筋は一部で山に隠れたように図示されている部分もあるが、街道沿えの民家とともに、記号として図示してあるとみるべきであろう。道幅が同じだからである。河川も同様で、決して風景画や鳥瞰図ではない。

この絵図はまた乗丹坊や金耀の墓を、多層塔として図示し、注記は剝離したのか見当らないが、これも記号だろう。新記の永正古図では、乗丹坊墓と注記された多層塔が図示されている。ところで現存の乗丹坊及び金耀の墓は、共に石造の宝篋印塔で、多層塔ではない。宝篋印塔は鎌倉時代に一定の形式が成立したといわれている。徳一墓は鞘堂の中にあるから、この絵図では形は不明であるが、これは石造の五重塔で、貞観2年(860)の築造とされている⁽¹²⁾。乗丹坊等の多層塔も古い形式を示すのかも知れないが、それを鎌倉時代以降に拵え直して、宝篋印塔に改めたと解釈すると、恵日寺開基の徳一墓が、古い形式のまま残されているのと、整合しないだろう。それ故、これは拵え直しではなく、はじめから宝篋印塔であったのでなかろうか。しからばこの絵図の乗丹坊墓等の多層塔は、層塔などの大規模の墓を示す記号とみるべきであろう。こうしてこの恵日寺絵図は、寺院を図示してはいるが、仏画の範疇に属するものではなく、古地図であると断定せざるを得ない。

Ⅲ 横物及び「横折損」の恵日寺絵図

さきにあげた正徳6年の実賀記録によると、恵日寺の什宝中に「當山新古絵図 二紙」があり、それはこの恵日寺絵図一紙と、先代尊悦が公儀に差上げるため作った元禄の恵日寺絵図下書一紙とである。ちなみにこの公儀は会津藩の役所である。これ以外の什宝は、巻巻・巻幅あるいは何個とされているから、当時この絵図は軸物ではなく、一紙文書であったことを明示している。それが既述の如く、この絵図の裏押紙に「古来依横折損多故享保七壬寅年 横物令表具者也」とあるので明らかかな如く、実賀が横物に表具させたが、文化6年(1809)完成の新記に「永正古図 一幅」とあるのを勘案すると、享保7年(1722)に軸物にされたと見える。但、それは横長の軸物で、現在のよように縦長の軸物ではなかったのであろう。

「依横折損」は、軸物にする前に、一紙物を折り疊んでいたから、横の折目にそう損傷ができたと読める。元来絹本着色物、特に継ぎ合わせ物は、折らないのであろうが、永正の修復後200年もたつてのこと故、折られていたのでなかろうか。さもなくば折り損ができない筈だからである。この恵日寺56世の実賀は、元禄15年(1703)、37才の時恵日寺本堂(現恵日寺)を建立し、正徳4年(1716)には、寛文5年会津藩で作った会津寺社縁起中の恵日寺縁起に、同寺の所在地を河沼郡と誤記されているのを、訂正して貰うため口上書を差上げ、耶麻郡と訂正して貰うなど、中興実賀とされるほど積極的に仕事をした人で、書き残したのを見ても着実であるから、横折云々の記事も信憑性が大きいと思われる。ここで横物と述べているから、横長の軸物にしたとみえるが、現在の恵日寺絵図は堅物である。これを横物とみるのは、この絵図の東西を上下とすることを意味しよう。

恵日寺境内の上下 ^{かみしも} 恵日寺ではその境内の東を上、西を下とする慣行が古くからあった。それはこの寺の重要な年中行事の御國祭における、舟引きの際の定法である。御國祭は國家安全稔穀成熟の祈禱をするこの寺の守護神磐梯明神の祭であ

る。その舟引きの件は恵日寺略縁起(前出注1)や、貞享2年(1685)の恵日寺書上写⁽¹³⁾にも明記されている。この境内の東を上とするのは、ここの水流が東から西に流れる用排水路の流動方向に依るのかも知れないが、それだけではないのでなかろうか。この境内の中心をなす金堂の向を南面とすると、磐梯明神の本宮がある磐梯山は東にある。また近世のここ大寺は猪苗代領大寺村である⁽¹⁴⁾。蒲生・上杉・再蒲生・加藤・保科(松平)各氏の時代とも、大寺は若松城在城の領主の領内ではあるが、猪苗代城には城代がいて、川東・川西両組を支配し、猪苗代領と呼ばれてきた。それが中世の猪苗代氏支配以来の傳統であろう。中世初頭の猪苗代氏は後述する如く、黒川の芦名氏とは対当の地位を保持していた。その據点の猪苗代は、恵日寺から見れば川上であり、真東に位置する。そこを上方とみるのは当然であろう。

実賀記録によると、恵日寺で御國祭を実施する際には、國主より磐梯明神の御仮屋を建てる用材を戴くとあるが、このことでもこの行事の重要性がうかがわれる。また前記の恵日寺本堂(本坊)の建築に際し、藩に用材の下附を願い出たのに対し、「他の寺とは違い……御國祭をも相勤候義ニ付 松材木百本末木共」下さる由申し渡されていることでも推察に難くない。実賀記録でも御國祭の舟引きにつき「東を上と定、西を下と定」とあるから、恵日寺絵図の東が上である。しからばこの絵図の東西が縦になり、南北が横で、当然横長の絵図とみなされる。それで実賀は横物としたのであろう。書画絵図など横長にかかれたものを、一般に横物と呼んでいる。

横折りによる損傷 この絵図で目立つ損傷は、東西方向ではなく、南北方向に三筋ある。その内絵具の剝離が特に目立つのは、この境内北西方にある龍象権現の南北にあたる部分で、幅約2cm、長さ50cmにわたって剝離している(写真2)。東部では大谷川の上流にあたる小屋川筋にそって、絵図の北端から南端まで、断続的にならぶ顔料の剝離線があり、1cm内外の幅で平行する剝離線もみえる。絵図の中央では、南北両端ではあまり目立

たないが、恵日寺境内の南の大谷橋東方から、中堂西側にかかる一線では、建物あるいは屋根が切断されて、その軒先が西側で6乃至8cmも南にずれている。これは絵絹の継ぎ目が切れて、あとの修復でうまく接合しなかったものとみられている。しかしこの筋にかかる大谷川では、川を横切る幅2～3mmの平行する二本の切れ筋があって、それらにはさまった部分は、河身が北方にずれているから、継ぎ目の損傷ばかりではなさそうである。三重ノ塔の屋根の西端もこの線にかかるが、補修したのか、ここでは食い違いはない。この中央の筋の接合の下手際は、どの時点で起ったのか定かでないが、永正8年、高野山まで持ち込んでの修復の時ではないのではなかろうか。

東西方向の損傷でやや目立つのは、磐梯明神の社殿西南方から、星宮と龍象権現との間を通り、絵図の西端までのびる筋である。ここでは幅1～2cmで、長さが30cm余に達する。絵図の中央部では、花川橋（高欄橋）の東南部が、甚だしく剝離している。こうして東西方向より南北方向の損傷が甚だしいことからみても、実賀が記述している横折りによる損傷は、南北のそれであると思われる。このように見ると、横折りとか横物の文言が理解できるだろう。

絵図縁縦横の切断 享保7年の表具の際、次に述べる事情からみて、この絵図縁の縦横を若干切り詰めたと見える。まずそれをこの

絵図の南端からみると、ここに南北4～5cmの図が接続していたと思われる。というのはこの絵図の下端左側で、寺領の領と藤倉の倉の字の下端が一部切り取られていることと、向井著の旧事雑考及び四家合考で、この絵図の注記を列挙してある中で、「藤倉二階堂」とあることを勘案すると、二階堂の三文字とともに、領及び倉の字の下端が切り取られたとみられるからである。この絵図でこの鳥居の奥にある鳥瞰図式の社殿は、赤呂宮で、二階堂（地藏堂）は図示されていない。神仏混淆

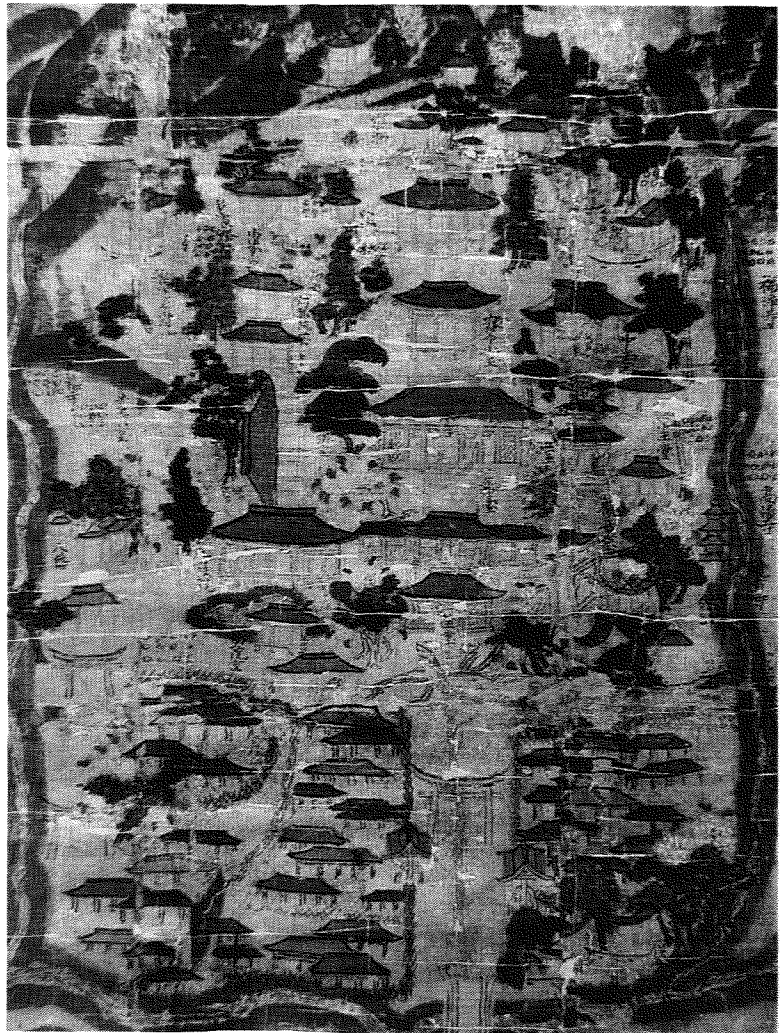


写真2 絹本着色恵日寺絵図の同寺境内附近

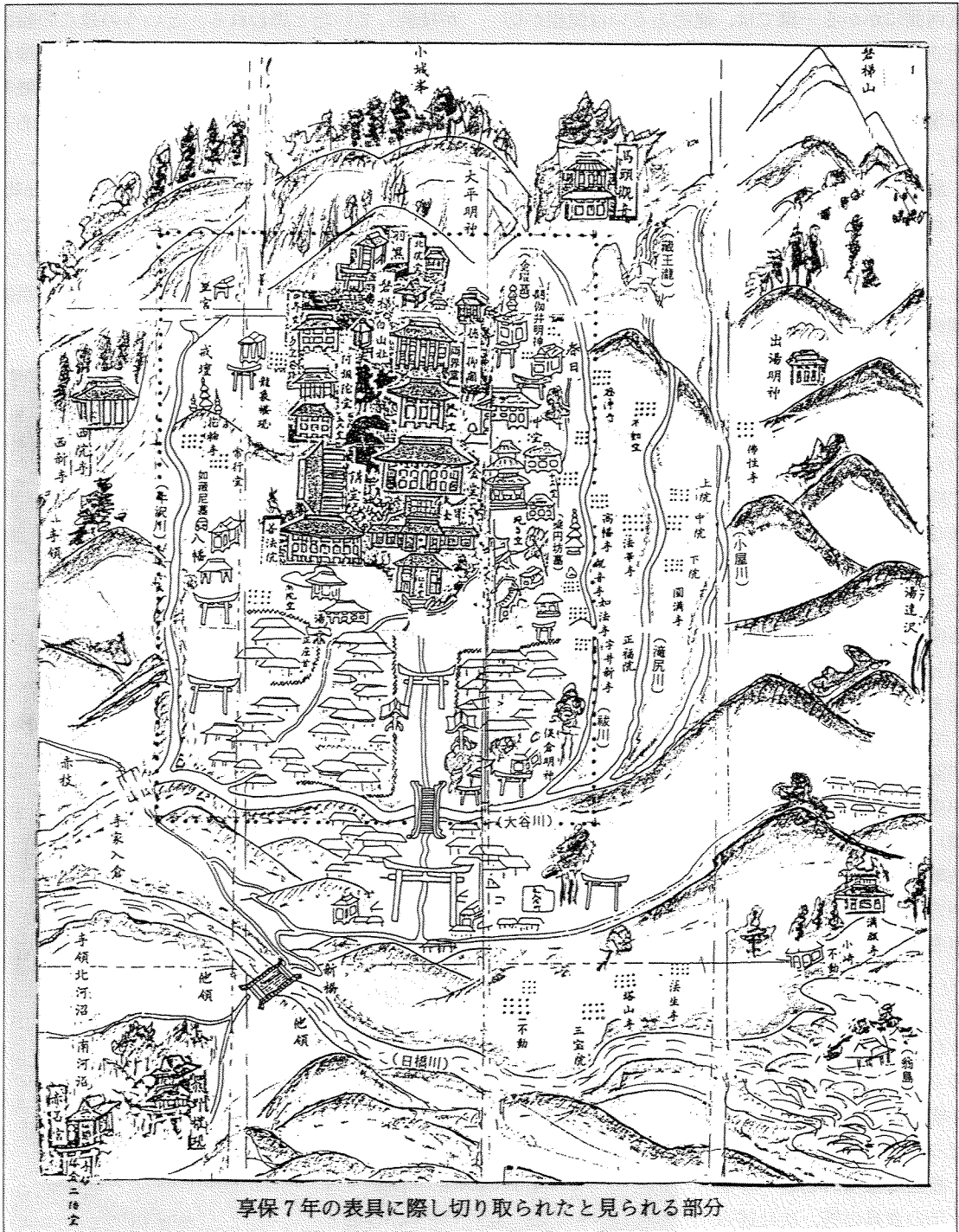


図1 絹本著色恵日寺絵図(写)

であるから、この社殿で地藏堂も図示したつもりであろう。今も藤倉二階堂の南西部に、赤呂神社が祭られている。新記ではさきに述べた永正古図の中に、藤倉と注した社殿がある。それ故文化年間以前に二階堂の三文字を含む部分が切り取られたのであろう。文化年間以前の修復は、享保の表具の際で、それは向井が藤倉二階堂の注記を確認した後である。こうして享保の表具に際し、下端の損傷の酷い部分を、上端や東西両端と共に切り取って、軸物にしたのであろう。上端も磐梯山や小城峰の注記の上方が、図郭線すれすれになっている。

東西両端は、この絵図に使用した絵絹一枚の幅を、南北方向の損傷線間の幅22.5cmとすると、それぞれ東西の縁まで加えて、3cm余を切り詰めたことになりそうである（図1参照）。

IV 恵日寺絵図と偏角

前節で述べた如く、この絵図の縦横それぞれ若干を切り詰めたから、この絵図の周辺に方位の注記があったのかどうかは不明になった。しかし慶長の越後國絵図の頸城郡図及び瀬波郡図のように、方位を記載しない絵図もある。それ故この絵図にも仮りに方位の注記がなかったとしても、この絵図の上下は、磁北・磁南を示すとみられる。それは次に述べる事情に依る推定である。

この絵図では恵日寺境内の南北の中心線が、多少西に寄っている。同寺の脇寺が恵日寺

境内の東側に多数あるためであろう。恵日寺境内では仁王堂・中門・金堂・根本堂及び両界堂の中心線が、大谷橋から花川橋までの参道の延長線とほぼ一致する。これを南北線としたと推定する理由の一つは、金堂・根本堂・両界堂等の礎石配置の中心線が、略一線上に並んでいる事であり、その二つは根本堂東側にある所謂五間四間堂の礎石の配置が、前者と似た方向を示すのに、その礎石の一部を利用して建立されたとみられる三重ノ塔の礎石が、大部分置き換えたようで、そのため五間四間堂に対して、三重ノ塔の方向線が、3.5°ほど東寄りになっているからである（図2）。すなわち前者の方向線は北16.5°西であるのに対して、三重ノ塔の方向線は北13°西になっている。これは西偏の地磁気の偏角が、4°弱小さくなった時点で、三重ノ塔を建立したことを示唆している。しからば平安時代の後半には、ここでは西偏していた偏角が、次第に小さくなりつつあったと見える。こうして恵日寺境内の中心線は、その建立当時の磁北-磁南の線を示し、それを南北と考えていたとみられる。天測で子午線の方角を求めれば、この

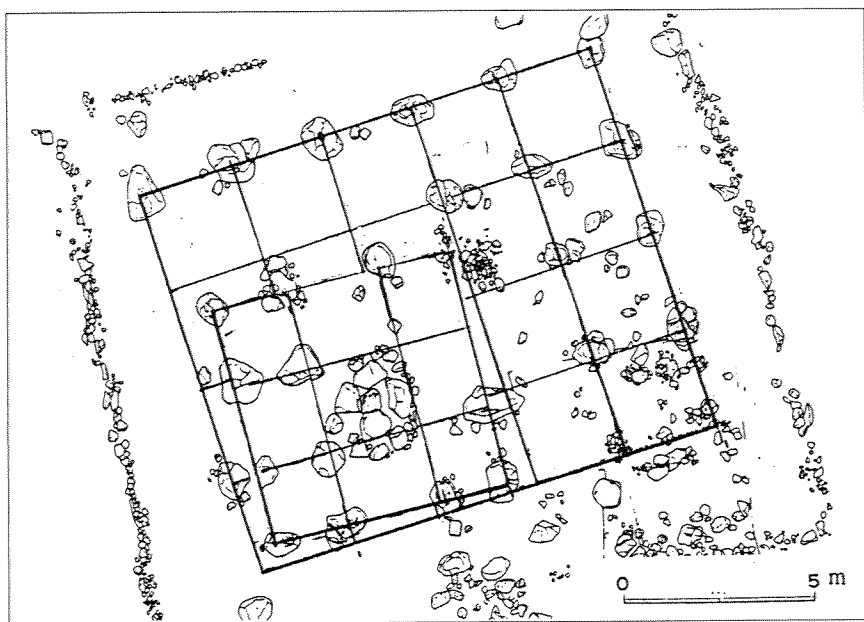


図2 五間四間堂と三重の塔の礎石配置図（史跡慧日寺跡Ⅶの図を一部補足）

ようなことは起らないが、磁石で磁北-磁南の線を求めると、いわき市の飯野八幡宮⁽¹⁵⁾や、仙台市の大崎八幡宮ならびに北山の諸寺院の如く、建立時の偏角に見合う方向を取るようになる。それ故、恵日寺の金堂・根本堂などが何時創建されたのかが判明すれば、その時代の偏角が西偏16°ほどであったことになる。他方、別の方法で南奥の古代及び中世の偏角の永年変化曲線がわかれば、この金堂等の創建年代の推定も可能となる筈である。

V 旧事雑考
と恵日寺絵図

旧事雑考では恵日寺の創建を大同2年とする縁起を載録し、この絵図に関して「東西十余里の間、多遺跡存焉」として、別表のような社殿・仏堂(含遺跡)等の名称を列記している。それは現存の恵日寺絵図では、判読不能のものも含むので貴重である。

四家合考ではこの表中の中堂を中門とするが、中堂は欠き、旧事雑考では中門を欠く。また雑考

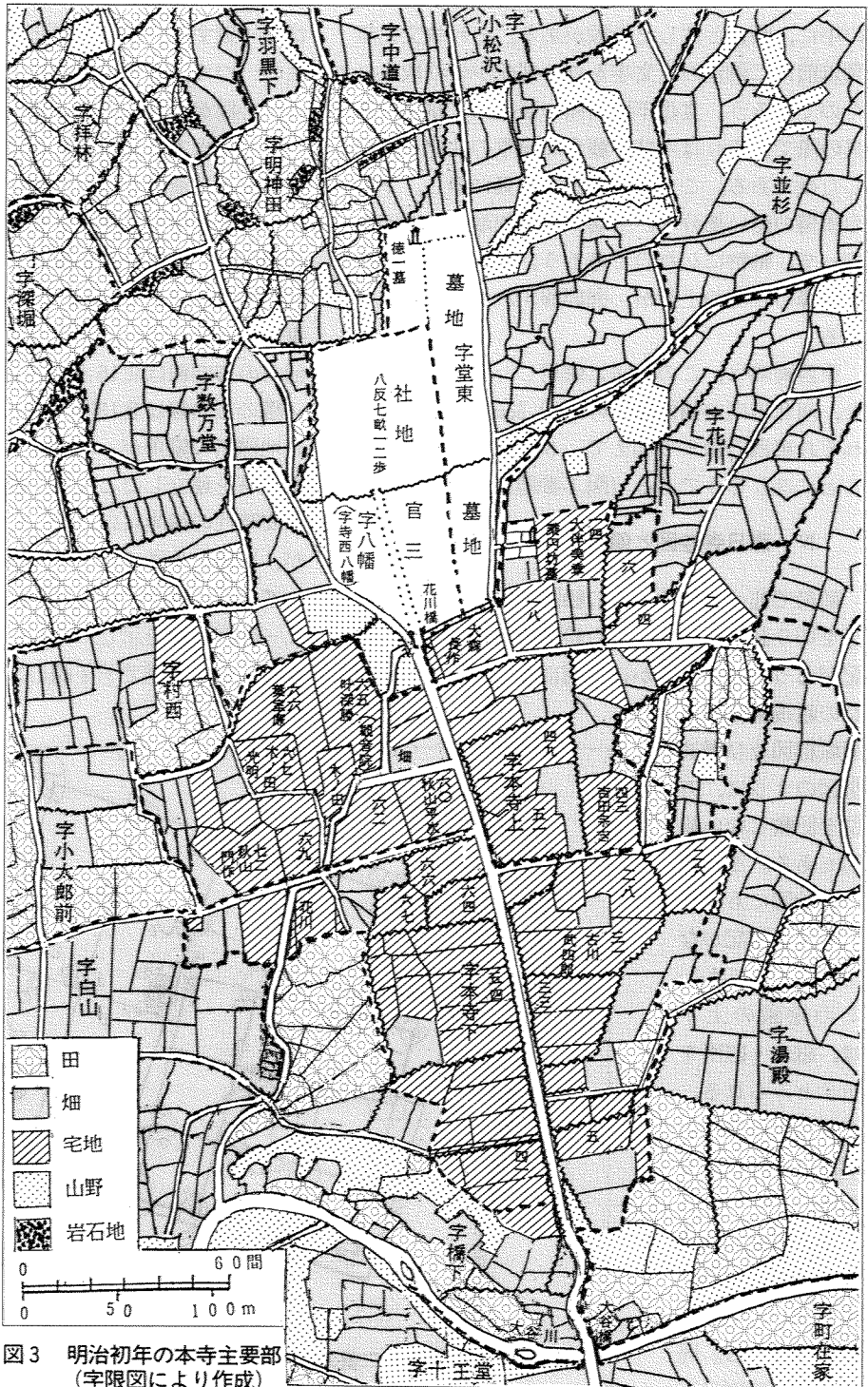


図3 明治初年の本寺主要部
(字限図により作成)

では福浄寺を福性堂、両界堂を西界堂とする等からみると、複写機のない時代だから、後人の写違

あるいは写落もあるのであろう。四家合考に挙げ

てある北院堂、新記に記されている藏王瀧・乗丹坊墓・如藏尼墓などの外、星宮など雑考に記載されないのも、後人の写落かも知れない。但、向井自身の手になる原典が所在不明なので、断定はできない。

ここにあげたものの外に2-3この絵図記載の郷村名等もあるが、向井が寛文中年にこの絵図を見るまでには、絵図作成後ほぼ400年近く経過していた筈で、摩滅して判読不能のものもあったのでなかろうか。例えば大谷橋東方で、大谷川右岸にある大谷明神や、猪苗代街道に沿う大寺の中心集落東方で、鳥居だけ描かれていて、社殿が見当たらない事例で、これらはこの絵図の古さを偲ばせる。

雑考に列記してあるものの内、關伽井明神・清瀧権現・権座首・二所権現・日天堂・月天堂などは、現存の恵

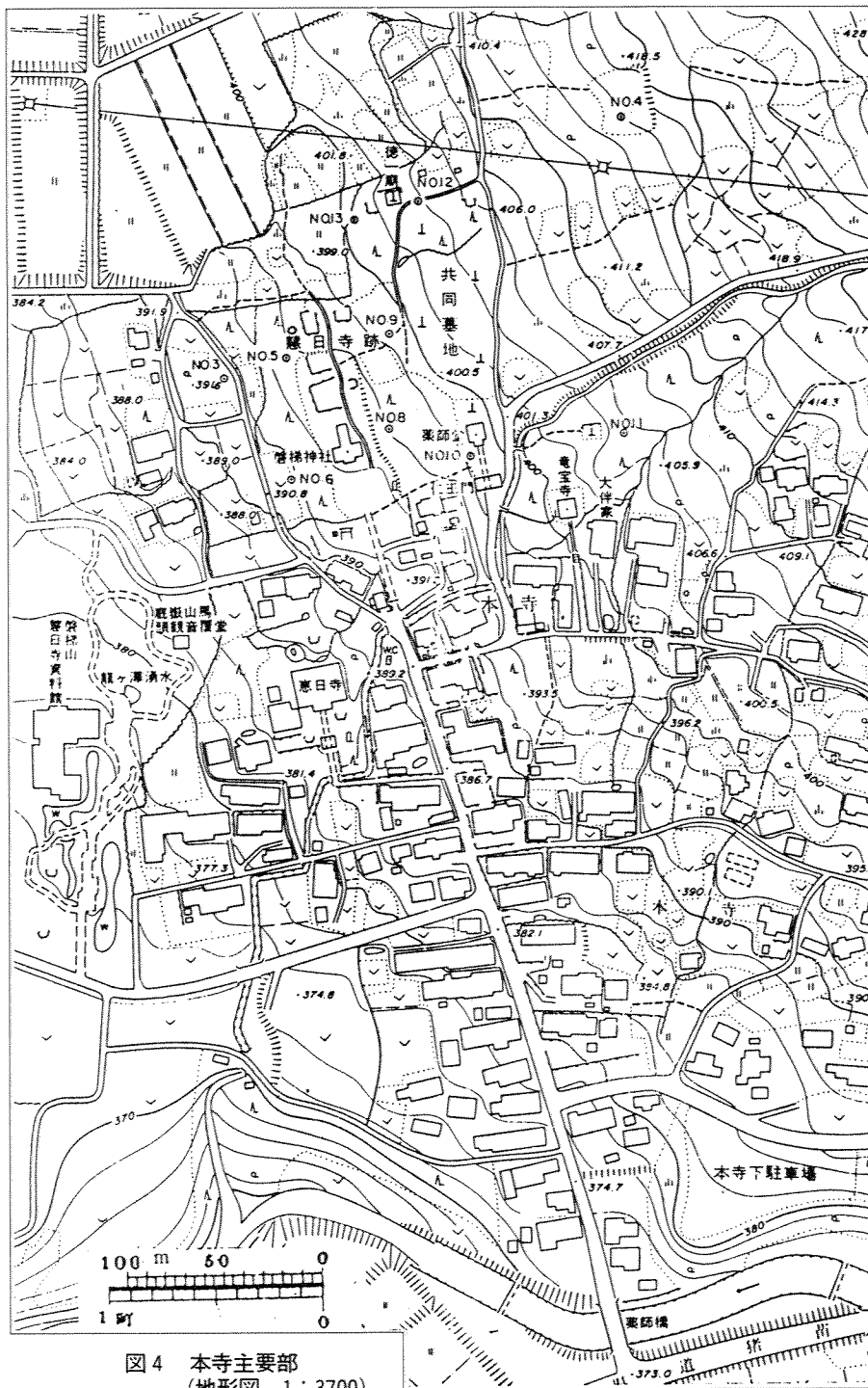


図4 本寺主要部
(地形図 1:3700)

日寺絵図では、注記は判読不能だが、これらは寛文以降に摩滅したのであろう（一覧表参照）。

乱人在所 この絵図に記載されていて、旧事雑考に列記されない注記は、前記の外に湯達沢・寺領北河沼・南河沼・寺領□□・他領及び乱人在所がある。もっとも雑考では社殿・仏堂を主として列記しているから、これらは除外されたのかも知れない。乱人在所は猪苗代街道に沿う大寺本町の北東部にある。ちなみに恵日寺門前の本寺の中心集落は、新町と呼ばれたから、この本町の成立が新町のそれより古いのであろう。この乱人在所を「乱人在所」と読んだ人⁽¹⁶⁾もあるが、乱入なら「乱入者在所」か「乱入人在所」としないと、意味が通じない語になるだろう。それはともかく、葦名

氏の家臣佐瀬河内か佐瀬平八郎が、大寺に館を築いたことを念頭においての事とも取られるが、しからば後述する如く、後年猪苗代氏が黒川の葦名氏の支配下に入ってから構築であろう。それ故、それはこの絵図に拘りのないことである。乱人は一般には反逆者か乱心者を意味するが、戒律を破った者かも知れない。寛文の恵日寺縁起にも「不容放逸者」とあり、ここにその者を収容したのかも知れない。

恵日寺寺領「十八万石」 旧事雑考にはこの絵図記載の多数の塔頭（脇寺）の遺跡名を列記しているが、そこに寺が立ち並んでいた時代は、恵日寺の盛んな時で、恵日寺の衆徒頭の乗丹坊が、養和元年(1181)、信州横田河原で討死する以前であろう。乗丹坊は越後の城氏と共に、会津四郡の兵を率いて、木曾義仲追討に出かけている。雑考ではその頃の恵日寺の寺領は、会津四郡にまたがっていたとするが、小川庄もこれに加わる筈である。新記でもこの寺が盛んな時代には「子院三千八百坊に及び、数里の間は堂宇軒を比し（中略）寺領今を以見るに十八万石計なり」と述べている。これは古老の口碑に拠るとするが、中世は貫文制であるから、近世の石高に換算して18万石余との意である。それは会津四郡に小川庄を加えた高で、文禄3年（1594）の蒲生領検地以前の氏郷領73万石余の内高であろう。しからば当時出羽の長井が17万9千石余、奥州の苅田は2万5千石余であったから、信達以南の仙道は35万石余となっていたかと思われる。これに就いては後日述べよう。

旧事雑考記載の社殿仏堂等一覧表

○磐梯明神	○龍象權現	∴花輪(華陰)寺
○羽黒權現	○大平明神	△關伽井明神
△毘沙門堂	△拝林	○馬頭權音 <small>騷</small>
○春日八幡	諏訪天満天神 <small>此四郡爲新寺</small>	●藤倉二階堂
○出湯明神	○熊野權現	△二所權現
○俣倉明神	∴字井新寺	○阿彌陀堂
○寺家入倉	△清瀧權現	∴佛性寺
∴高幡寺	∴法花(華)寺	∴觀音寺
∴如(妙)法寺	∴圓満寺	○満願寺
∴塔山寺	○西院寺 <small>又新寺</small>	∴正福寺
△觀音堂(院カ)	○十王堂	○二(仁)王堂
∴不動堂	○根本堂	○南院堂
○不動堂 <small>(今)</small>	○善法堂	∴常行堂
○西(両)界堂	○五大堂	△大黒堂
○觀音堂	○徳一廟	∴多宝堂(跡)
∴知足院	∴福性堂 <small>(福淨寺)</small>	∴三宝院
△辨財天	△日天堂	△月天堂
○正座首	△權座首	○赤呂宮
∴上院	∴中院	∴下院
○赤枝 <small>今赤田也</small>	△翁島 <small>舊中</small>	○金堂
○講堂	○舞台	○中堂
○白山		

注：○印は現存の恵日寺絵図中にある。
∴印は同絵図中に遺跡としてある。
△印は同絵図に注記なし。
下線は四家合考に記載あり

VI 恵日寺境内の仏堂・社殿と門前屋敷

恵日寺絵図は四至傍示図ではないので、恵日寺境内すなわち院内の範囲は、明示されていない。しかし享和3年（1803）の大寺村地志扁集によると、俣倉明神・天満天神・觀音院なども院内とあるから、大谷橋（現薬師橋）北方から花川までの門前屋敷も、院内に含まれていたとみられる。

恵日寺の門前屋敷 恵日寺絵図での同寺門前屋敷は、参道の両側でそれぞれ柵をめぐらした二つの屋敷構になっていて、各一ヶ所の總門を通じて

出入りしていた筈である。注記は何もないが、多分恵日寺に奉仕する人達の屋敷で、後年他の社寺でみられる門前町・鳥居前町とは、様相が異なっていた。元禄2年(1689)の金剛院恵日寺絵図(以下元禄絵図と略記する)では、観音院がこの西側の門前屋敷の内にあつて、花川を境に現恵日寺と接し、地志扁集によると「横拾七間 堅式拾八間」の広さをもっていた。これは現恵日寺東南で、28間は西側門前屋敷のこの部の奥行に相当する。新記ではこの観音院は、別当観音院とあり、恵日寺仁王門の前で、「境内東西二十三間、南北八間年貢地」とされている。これは花川橋東南側で、東側門前屋敷の柵の北側の道に面していた。この別当観音院は年貢地とあるから、近世のこの門前屋敷は年貢地であろう。元禄絵図で天満天神は天神宮として花川橋東方、新記の別当観音院の東側に図示されている(図5)。元禄絵図に附記されている恵日寺境内の広さは、「南北百二十間、東西百二十間」で、4町8反歩余であるが、それはこの門前屋敷も含めての広さであろう。

恵日寺本坊 絹本著色恵日寺絵図では、門前屋敷の北西方に、花川右岸で柵をめぐらした一構の屋敷が図示され、正座首と読める注記がある。ここは新記でいう恵日寺本坊で、現恵日寺の境内である。この絵図ではその東北部に總門があり、仁王堂の方から出入りするようになっていた。元禄絵図ではこの本坊を矩形に柵でかこんで、中に「恵日寺」と注記されている。恵日寺の住職の居所というのであろう。その總門は恵日寺東南に、東面して建てられていた。他に南側にも門があり、現在恵日寺の正門となっている。

仁王堂以北の境内 新記の恵日寺の「境内三千百四歩免除地」(1町3畝14歩除地)は、恵日寺本坊も含むのであろうが、元禄絵図では恵日寺境内北部の白山社のすぐ西側に、「御年貢地」が入り込むなどで、この境内1町3畝歩余の除地の地所が、どこま

で広がっていたのかは、明示されていない。しかし明治初年の地租改正で、社地(官三)とされた8反7畝12歩(図3)とこの本坊とでなかろうか。元禄絵図ではこの社地の北東部に接続する徳一御墓附近の「南北三十老間、東西三十八間」すなわち3反9畝余の地所があるが、ここは墓地であるから、見捨地にされていたのであろう。墓地は勿論のこと、堂宇数も見捨地にされた事例が、外にあるからである。

この新記の恵日寺境内1町3畝余歩の面積は、地志扁集の「恵日寺境内 東西百廿老間、南北百廿間 免除キ地」の記事とは大差があるが、地志扁集では古い資料をそのまま記載したのでなかろうか。あるいは元禄絵図の附記をそのままとった

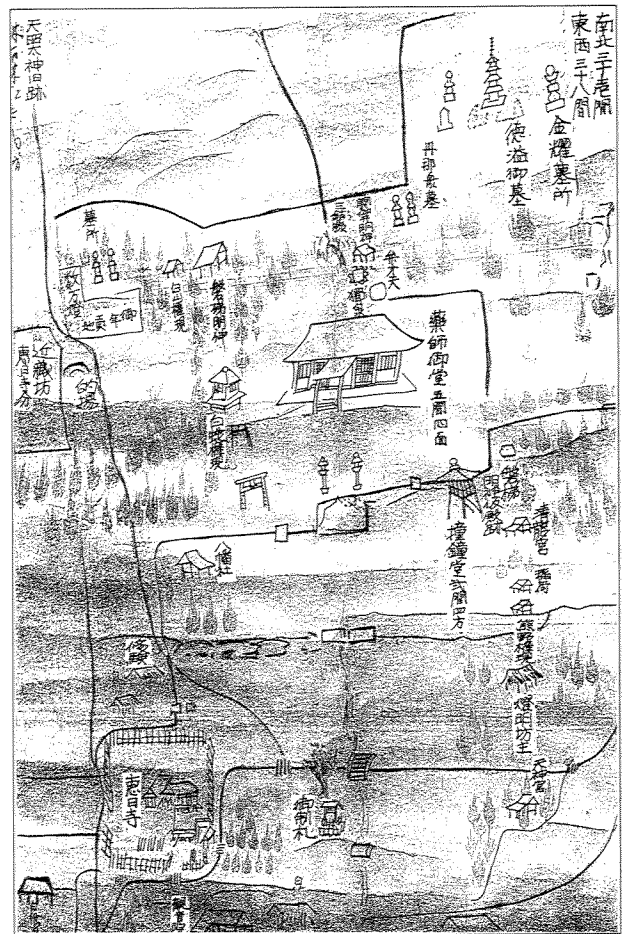


図5 元禄の磐梯山金剛院恵日寺絵図の主要部 写

のかも知れない。但、元禄絵図では「免除キ地」とは記載していない。この4町8反余には、徳一墓その他の見捨地や、さきあげた門前屋敷も含むのであろう。

恵日寺絵図では花川橋（高欄橋）の北側に、仁王堂（門）・中門・舞台・金堂・根本堂及び両界堂（注記摩滅）の大規模建造物が並び、その北に磐梯明神の社殿がある。この中央の建物列の東側には、南から観音堂・三重ノ塔・十王堂・中堂・春日・關伽井明神（注記摩滅）が、互に東西に多少ずれて並んで、北端に徳一御廟が図示されている。中央の列の西側では、南から南院堂・善法院・講堂・五大堂・阿彌陀堂及び由界堂が南北に並ぶ。この東西両側ともに、中央の列と同様に、大形の建物が目立っている（写真2・図1）。

この絵図では由界堂の北東に接して羽黒（権現）、西側に龍象権現が図示されているが、それは恵日寺境内ではない。羽黒は新記の羽黒神社で、「金堂の北十五町山上にあり」とされ、地志扁集では「羽黒権現 子ノ方ニ当テ大寺ヨリ十六丁、本寺よりハ八丁余、但シ横四拾間、豎二十五間」とある。この距離は両者間で差があるが、恵日寺の境内でない点は共通している。龍象権現は新記では「金堂の戌亥の方八町計にあり（中略）龍ヶ沢と云、空海請雨の法を修せし所」云々とする。地志扁集では「本寺村より戌亥ニ当テ八丁隔 池幅貳間半四方 端ニ竜ケ化石有」とする。これも北の山中にあり、恵日寺境内ではない。平凡社の歴史地名大系で、羽黒・龍象両社が境内社であるとするのは誤解である。

恵日寺境内には前記の外、旧事雑考記載の清瀧権現・辨財天・大黒堂などもあった筈である。元禄絵図にも清瀧宮と辨財天は境内に図示されている。その清瀧権現は恵日寺絵図では、中門の東側にある社殿で、継ぎ目の損傷で、西半分がずれている社殿であろう（図1）。この外廂堂となった常行堂その他の遺跡も図示されているが、この絵図では金堂を中心に大伽藍が多数残っていて、当時なお大寺の名に相應しい様相を示していたとみられる。かくて異本塔寺長帳でも、觀應元年(1350)

恵日寺薬師堂再興を記載するが、旧事雑考でも同年「或記日 大寺薬師安座」とする。この安座は金堂すなわち薬師堂の再建を意味するのであろうが、郷村名としての大寺というだけでなく、その名の通り、大寺院が存在していたのであろう。

新記でもこの境内につき「宏基巨構にして院宇多かりし」と述べている。これは寛文風土記の「宏基巨麓」を換言したのであろうが、何れもこの絵図での境内の様子を形容しての文言である。

ちなみに元禄絵図に仁王門が図示されていないことを根拠にして、元禄頃はここに仁王門がなかったとする見解もあるが、どうであろうか。新記の永正古図には中門が記載されていない。だからといって、中門がなかったと断定することは不可能だろう。他に資料がない限り、地図・絵図に図示されていないことを支証として、それがなかったと断定することはできない。ここで明確なのは、仁王門の存否ではなく、この元禄絵図に仁王門が図示されていないということだけである。

磐梯明神と恵日寺 絹本著色恵日寺絵図では、恵日寺境内の奥に、徳一御廟と並べて、磐梯明神が図示されている。この寺の開基の徳一が、「縁あらば我又こんよいわはし磐梯の、山ふもとのきよみず清水の寺」とよんだとされることや、恵日寺の山号の磐梯山から推察して、磐梯山の信仰をこの寺の基本としていたことが窺われる。すなわち磐梯山の山岳信仰と、薬師信仰とを習合させたのであろう。

この磐梯明神の本宮は、大磐梯山の山頂にあるが、この山頂以西は、恵日寺がある本寺・大寺村の一角で、そこから猫摩岳・厩岳山・古城峰とつながり、いずれも本寺・大寺村の内で、両村合併後は磐梯村となる。こうして本寺の恵日寺が磐梯山の麓であると考えていたのであろう。

恵日寺に関わる山岳信仰は、磐梯山だけが対象ではない。この恵日寺絵図でもわかるように、古（小）城峰中腹の大平明神、山麓に近い山にある羽黒権現、境内社の白山社等みな山神である。雑考記載の二所権現（伊豆山及び箱根権現の二所）・熊野権現も同様である。但、羽黒権現の本地は正観音、白山社の本地は十一面観音とされているか

ら、薬師との習合は磐梯明神であろう。正しく磐梯明神の本地を薬師とする人もある。

明治2年(1869)の神仏混淆禁止令で、恵日寺は一時廃寺となるが、この金堂附近は磐梯神社の社地となって、今日に及んでいる(図4)。

Ⅶ 恵日寺絵図の寺領と他領

この恵日寺絵図には、仏堂・社殿名の外、山名・郷村名の注記もある。その中で寺領と頭注のあるものが2-3あり、郷村名をあげずに他領とだけ注記されている所もある。ここでこの寺領と他領を検討してみよう。寺領には寺領北河沼、寺領藤倉(二階堂)、寺領□□がある。寺家入倉も寺領入倉でなからうか。

入倉には恵日寺子院の阿彌陀堂があるが、この絵図には図示されていない。入倉は赤枝と共に、後年塩川組内の村であるが、入倉全村が寺家ということはないのでなからうか。それ故寺領入倉の誤記のようにみえる。

赤枝の北方に「寺領□□」の注記がある。判読不能であるが、この絵図の近世の写図である恵日寺蔵写図、慧日寺資料館蔵写図共に、「寺領竹羽村」とする。いずれ塩川組内の村であろうが、この組内に竹屋村はあるが、竹羽村はない。羽と読めそうな墨跡の残りは、上の領の文字より右側に片寄っていて、某村の羽村とも読めそうであるが不明である。

日橋川の南方に寺領北河沼・南河沼、更に南方に寺領藤倉(二階堂)が図示されている、この後者の括弧内の二階堂は、前述の如く切り取られて、今はなくなっている。この藤倉は南河沼であろうが、さればとって寺領北河沼南河沼と続けて読むのは適切でない。南河沼の文字は北河沼とは離して書かれている。それだけではない。鎌倉時代の藤倉には藤倉館があって、それは藤倉氏の居館であり、同氏が金上経由で津川に移っても支配は続き、その後貞治3年(1364)頃は小高木の總領の平氏の支配であったとみえる故、それが恵日寺の寺領である訳はないからである。

寺領北河沼 河沼郡は現在、東は河東町から西

は柳津町までを含むが、会津坂下町以西は、11世紀中頃は蜷川庄(異本塔寺長帳)で、湯川村以東の河沼郡と区別されていた。蒲生領の文禄3年の高目録帳の稲川・河沼の区分も同様である。藤原時代に冷泉宮^{れいせい}の荘園がここに成立し、河沼郡西半が蜷川荘になったという。

八田野の開発年代は定かでないが、中世の河沼郡の内の八葉寺附近以東は、翁島火山性泥流の流れ山や泥流窪地の湿地が多く、大部分が未開の原野であった。その村の大部分は、近世の開発の新田または新村である。それ故中世の北河沼は、郡山附近から北方の熊野堂・堂島・八葉寺などの近傍をさすと思われる。この堂島には堂島の館があり、天長元年(824)甲辰、大寺侍佐瀬權大郎^(大)清光が居住したという(会津鑑)。大寺侍は大寺薬師すなわち恵日寺に奉仕する代官とみられている。その館の位置に就いては異説もあるが、福島県の『中世城館跡』では、新記の堂島新田の権現堂跡(堂島館)とする。すなわち日橋川の権現堂淵附近の屈曲部にのぞむ要害である。

熊野堂の高館(河東町熊野堂字高館)は、恵日寺侍とみられる斎藤大藏俊長の居館であるとされ、同じ熊野堂の字古屋敷には、富田屋敷とよばれる地所があつて、恵日寺侍の富田氏の屋敷があつたと伝えられている。富田氏はさきの佐瀬氏と共に、後年輩名氏の四天王となる。四家合考によるとこの富田氏は「昔年恵日寺全盛の時、地下を検断して、当時の名主郷頭などの類の者」だという。この「当時」は勿論、四家合考編纂の寛文の頃をさしている。富田家年譜では、貞應元年(1222)3月、佐原光盛が弟盛時(加納氏上三宮)と、恵日寺に花見に出かけて、同寺の有司富田漏祐に出逢い、仕官を勧めたが、漏祐は固辞して、一子千秋を出仕させたという。当時の富田氏の在所は定かでないが、熊野堂ではなからうか。ちなみに輩名氏四天王五千石の富田氏知行地は、荒井である。

現在の河沼郡湯川村は、中世初頭は北田城に據る北田氏の支配地であろうから、そこが寺領の北河沼ではあり得ないだろう。

寺領藤倉二階堂 現在藤倉二階堂の名称は、明

治36年(1903)4月15日附で國指定の重要文化財「延命寺地藏堂」の通称である。現存のこの建物は室町時代の中頃の建造とされるが、地藏堂はそれ以前から存在した。すなわち寛文風土記及び新記では、大同年中の創立とし、旧事雑考の延久元年(1068)の記事に「密侶承惠興 於河沼郡藤倉村伽羅陀山延命寺廢世 所謂二階堂別当職也」とある。それ故この地藏堂は室町時代中頃の建て替えである。この藤倉二階堂即地藏堂の東200mの所に、藤倉館があり、会津の守護佐原十郎左衛門義連の子盛連の第三子盛義が築いたとされる。この館は東西46m、南北40mの矩形で、三面土居に囲まれ、南側には堀形が残されている。盛義の孫盛弘が、河沼郡の金上館に移り、更に津川に移るが、康元元年(1256)には、この藤倉館の北東部の土居の上に、黒川から勧請した稻荷社を建てたと伝えられているから、津川に移っても、藤倉村は藤倉氏(金上氏と改姓)の支配地であったと思われる。

この藤倉村は、実相寺文書⁽¹⁷⁾に依ると、14世紀中頃までには、小高木の總領平景兼の所領になっていたと思われる。それは次の史料による。

寄進 実相寺陸奥國河沼郡藤倉村内 了仙在家
 一字田一町事 右彼所者 景兼爲重代相伝之地
 無当知行干今相違之間 爲祖父祖母菩提 永代所奉寄進 若於景兼子孫中他人於被致違乱之輩者爲不幸之仁 所持所領申公方 無所殘可有永代押知行之状 如件
 貞治三年十月七日 平 景兼

同じ日附の実相寺への沽却文書もあり、沽却かも知れないが、何れも藤倉村の了仙在家一字と田一町にかかわる。「重代相伝」は極り文句かも知れないが、これは在家一字だけでなく、藤倉村が景兼の所領なのであろう。但、次節で述べる事情によると、当時藤倉二階堂は、まだ恵日寺の寺領であったと思われる。

ちなみにこの了仙在家の1町の田地は、ここに残る方形の地割からみると、条里の1坪にあたるように見える(但 1反360歩の古法である)。

他領の事 この絹本著色恵日寺絵図で、他領の注記があるのは、日橋川南岸で新橋附近の二ヶ所

のみである。これは郷村名を附記していない。八田は墾田^{はりた}の轉化で、新開を意味するとか、湿地を意味するとも解されているが、新開墾田であろう。しかしこの八田野の開発年代は不明である。但、恵日寺縁起では、八田野の稻荷ノ森で三鈷杵を投げ、恵日寺建立の場所を選定したとするから、当時八田野の一部が開かれていたことになる。そこが他領とあるのは、恵日寺の寺領でないということだけであろうか。この疑問は、この絵図の東西には、他領の注記がないことから起る。

中世初期の耶麻郡は、東部が猪苗代氏、中西部は佐原氏(加納)及び新宮氏の所領となっていた。猪苗代氏は拠点を猪苗代に置くが、その所領は現在の猪苗代町・磐梯町の外、塩川町にも及んでいたと思われる。それは次に挙げる畠山・吉良連署の吹挙状その他に依る推察である。

三浦大炊小太郎左衛門尉盛通妻平氏申 陸奥國耶麻郡内下利根河村当知行分安都事 申状老通謹進覽之 子細載干状候 以代官 令言上候 可被經御沙汰候哉 以此旨 可有御披露候 恐惶謹言

貞和四年八月十二日 右馬權頭國氏花押
 右京大夫貞家花押

進上 武藏守殿^(高、師直)(18)

この三浦盛通は猪苗代氏で、その後室平氏が、かねて示現寺に寄進してある下利根川村の知行安堵を、貞和4年(1348)8月に伺った際の、多賀國府の奥州管領畠山國氏及び吉良貞家の、高師直に対する吹挙状である。永和元年(1375)には同じ後室の讓状⁽¹⁹⁾もあって、この下利根川村が猪苗代氏重代相伝の所領であったことが判る。それが應永20年(1422)2月の葦名盛政寄進状⁽²⁰⁾では「下利根河村 猪苗代本知行分」の地を、盛政がかわって、示現寺に寄進しているから、元(旧)猪苗代領が黒川の葦名氏領に変わったのである。この下利根川村は現在の塩川町内の北部にあり、入倉・赤枝とともに近世の塩川組内である。それが示現寺の寺領であったため記録が残されたが、記録が残らないこの村近傍の村々も、嘗ては猪苗代氏の所領であったとみられる。

14世紀中頃、猪苗代城主の後室が、奥州管領を通じて、足利氏の執事高師直に伺を立てているから、四家合考の著者が推定した通り、当時の猪苗代氏は、会津の葦名氏の家臣ではなかったと思われる。これと同じ関係は、應永11年(1404)7月の仙道諸家一揆連判状⁽²¹⁾でも窺われる。すなわちこの連判状では猪苗代城主参河守盛親は、安積郡中地の沙弥性久らと、笹川・稲村公方に組み、仙道諸家と同盟を結んでいる。これは会津の葦名氏との別行動を示す。

その猪苗代領は、南は日橋川境であるから、日橋川以南は他領で、恵日寺境内の東西で、この絵図に示された地内には、他領はないのであろう。かくして当時の恵日寺は猪苗代氏の所領内にあったと思われる。

VIII 恵日寺絵図の作成年代考

在来の所説 これまでのこの恵日寺絵図作成に関する所説では、この絵図の恵日寺境内に乘丹坊及び金耀の墓や、十王堂が図示され、乘丹坊らの墓が鎌倉時代の特色を示す宝篋印塔であること、並びに十王堂は地藏十王経の成立が鎌倉時代の初だといっているので、鎌倉末期以降、室町時代の初の作といわれてきた⁽²²⁾。

前述の如く日橋川以南に他領の注記があるから、鎌倉時代以降の作に違いないが、本寺の観音院の古寺取調書(前出12)に依ると、明治初年この観音院所有地にある乘丹坊墓が建治2年(1276)10月の建設とあるから、それ以降であろう。その墓は塔身に梵字を刻んだ宝篋印塔であるが、乘丹坊戦死の経緯も記述し、過去帳によるとしているから、この墓の建設年代も過去帳に追記されていたかと思われる。ちなみに金耀の墓の記載はないが、平安時代の建設といわれる徳一墓は、貞観2年(860)11月の建設、如藏尼墓は建設年代不詳とある。この絵図には多数ある子院の遺跡及び名称を、細密に図示しているから、それらが廃寺になって以来、余り歳月が経過しない時点で、この絵図が作られたことを暗示している。

絵図等に依る年代考 東北大学の有賀祥隆教授

の鑑定によると、この絵図の絵絹(綾織)・絵具及び筆致からみると、鎌倉末期や南北朝時代の作ではなく、室町時代で「應永年間の前半(1394~1411)は遡りえない」という。この1411(應永18)年は、次の件に拍りがある。

藤倉村の浅野権現堂 前述の如くこの絵図は永正8年修復であるから、それ以前の作であることは疑いないが、この絵図に浅野の熊野権現が示されているのをみると、以下述べる如く、應永18年以前の作とみられる。

この熊野権現は藤倉二階堂の東北に図示されている。これを熊野堂村の熊野権現とみた人もある如くであるが、そうではない。というのは熊野堂の熊野権現は、應徳2年(1085)に、耶麻郡新宮に遷されたからである。この絵図の熊野権現は、藤倉村浅野の熊野権現であるが、藤倉二階堂のように「寺領」とは頭注されていない。しかし鳥居と門とみられる正面図の奥に、鳥瞰図式で熊野の神殿が図示されている。この絵図では恵日寺境内の外にある羽黒権現・八幡社なども、寺領の頭注はない。猪苗代湖畔蟹沢村の満願寺、西方上西連村の西院寺などの恵日寺子院(新記)も同様である。浅野の熊野権現も恵日寺の守護神の一つであるから、この絵図に図示されたのであろう。元禄絵図では恵日寺境内に、熊野権現が祭られているが(図5)、浅野のそれを遷したのであろうか。この浅野の熊野権現は、藤倉村浅野の権現堂の所在を示すから、注目に値する。それは次の沙弥寄進状⁽²³⁾に関わりがあるからである。

寄進 河沼郡藤倉村内浅野権現堂 大沼郡長岡
村内金俣所 門田中荒居内三所宮事

右融通寺令寄補所也 守先例可被致沙汰状如件
應永十八年十月十一日 沙弥 花押

旧事雑考に依るとこの沙弥は葦名盛政であるが、盛政は前年すなわち應永17年6月、北田城を攻略して、北田氏を亡ぼし、同27年には新宮城も攻略している。こうして永享6年(1434)6月の盛政讓状⁽²⁴⁾では、耶麻・河沼各郡や蜷川・新宮・加納の各庄も含むから、藤倉村も盛政領になっていたのであろう。その藤倉の浅野権現堂を、盛政

が融通寺に寄進しているから、それが恵日寺の鎮守ではなくなっていたのであろう。この浅野権現堂が熊野宮の境内を含むとみられるから、この絵図は應永18年以前の作と見られる。

IX 恵日寺絵図からみた恵日寺の地理的環境

独古清水と閼伽井明神 この恵日寺絵図の両界堂東方に、閼伽井明神の社殿と鳥居とが図示されている。この明神の西側は損傷が甚だしい部分で、両界堂との間にある独古清水（元禄絵図では獨泉とする）・三鉢藤は、この絵図では判読不能である。閼伽は水または仏前に供える水を意味し、それを汲む井戸あるいは泉が、閼伽井である。閼伽井明神はこの独古清水の水神であろう。三鉢藤は紫藤で、恵日寺創建の際、何処に建てるかを定めるのに、三鉢杵を投げたら、この紫藤にかかったと縁起に述べてある。この寺を清水寺と呼ぶのも、この清水に由来するのであろう。

この近辺にはこの清水の外、梵天清水・如藏尼清水・唐桶清水などがある。梵天清水は三鉢杵の落ちた場所を探す折に、ここに来て休んだら、梵字が水面に出現して、戊亥の方向に流れ、紫藤の所在を知らせたと伝えられている。この附近は沖積錐の湧泉帯である。

沖積錐と扇状緩斜面 恵日寺近傍の地形を扇状地と呼ぶ人もあるが、沖積錐と呼ぶのが適切である。扇状地（沖積扇）は沖積錐と同じく、扇形を示すが、前者は勾配が緩く、円礫と土砂との堆積物で構成される。これに対し沖積錐は小形で勾配が急で、亜角礫と土砂とで構成される。更に勾配が急になると崖錐と呼ばれる（図6）。

恵日寺近傍の沖積錐は、古城峰から流出する花川の沖積錐で、妙法原附近は前山沢川、塩ノ原附近は祓川の沖積錐である。これらが複合して扇状緩斜面を形成している。その北縁はやや勾配の急な崖錐状の斜面に続いて、北の山地との間の勾配の変換線は明瞭である。その線に沿って猫魔山麓の林道が開かれている。この扇状緩斜面の南縁は、大谷橋以東ではほぼ大谷川に沿い、その支流瀧尻川の線となって東西に延びる。その南は翁島火山

性泥流の堆積地区である。この絵図ではそこにある小起伏の丘陵を、誇張した山の形で図示している。

藏王瀧と瀧尻川 この絵図には北部の山から流れ出す小屋川（大谷川の上流の名称）・瀧尻川・祓川及び牛沢川が図示されているが、河川名の注記はない。瀧尻川は蛇追瀧の瀧尻の川である。この瀧は新記で藏王瀧とし、「永正古図」にも同じ注記がある。しかし恵日寺絵図では瀧は図示するが、瀧名は摩滅したのか見当たらない。この瀧の下に石窟があって、不動を祭るから不動瀧の称もある。この北部の山地は、麓の水源涵養区で、各河川の流水は堰水として利用され、扇状緩斜面の下部に点在する水田を灌溉していた。また各河川の伏流水は、湧泉を涵養している。

恵日寺の三橋 恵日寺略縁起（前出注1）では、日橋・大谷橋及び高欄橋（花川橋）を、恵日寺三橋とする。この絵図ではこの三橋がみな欄干橋で、牛沢川に架した橋とは相違して、入念に描かれている。これは順に過去・現在・未来の三世を表わし、これらを渡ると薬師如来に結縁すると、略縁起に述べられている。

日橋はこの絵図では新橋と注記され、地志扁集では「古は新橋と書き候得共、塩川組落合村にて新橋を掛け、即新橋と唱、依之日橋と改」と述べている。落合村は日橋川と大谷川との合流点にあり、その新橋は寛永20年（1643）から慶安2年（1649）までかかって完成した（磐梯町史）。大寺の新橋もその名の通り新しい橋であろうが、架橋年代は不明である。但、この絵図にあるから南北朝時代以前の架橋であろう。これは会津平と恵日寺とを繋ぐばかりでなく、猪苗代街道の橋である。日橋川はこの附近で深い峡谷を刻むから、この絵図に示す如く、街道は大きくくの字なりに曲折して谷間に降り、橋にかかる。これは昭和時代になってもしばらくは同様であった（図6）。

大谷橋は大谷川に架されているが、この川も深く川床が刻み込んでいる。しかし川幅が狭いから、その両岸に石垣を築き、支柱なしの橋を架していたという。

会津平と恵日寺 磐

梯山を神体とする神社は、この磐梯明神の外には、猪苗代見祢山の磐梯神社がある。これは斉衡3年(856)に石椅神社として従四位に叙された式内社であるから、恵日寺より創建が古いのであろう。恵日寺は同じく磐梯山の磐梯明神を守護神としているのに拘らず、この山から離れて、古城峰の麓にあるのは、この寺の縁起にある如く、八田野の稻荷ノ森で占って、その建立位置を定めたことだけに依るのであろうか。磐梯山の魔魅を降伏させるのに、その近くでは加持

ができない事情があるなら、また別の事になる。

恵日寺創建以前の会津平は、大塚山古墳を始め、多数の古墳があり、8世紀の後半には多賀城の漆紙文書⁽²⁵⁾でも判るように、東北地方でも条里制が施行され、会津平にも方々にその遺構が残されている⁽²⁶⁾から、ここで早くから稲作が普及していたことは推察に難くない。それで仁平4年(1154)の恵日寺有請雨経記(旧事雑考)のように龍象權現で雨乞をやり、建治元年(1275)の県重要文化財紙本墨書田植歌でも判るが、2月の御國祭でも「稔穀成熟之御祈禱」をする。山の神は田の神でもあり、恵日寺が会津の農民の信仰の中心となっていたかと思われる。こうして古城峯の麓は、会津平に近く、磐梯山の麓として、恵日寺を建立したのでなかろうか。

む す び

(1) 恵日寺絵図は室町時代初頭の作成とみられる

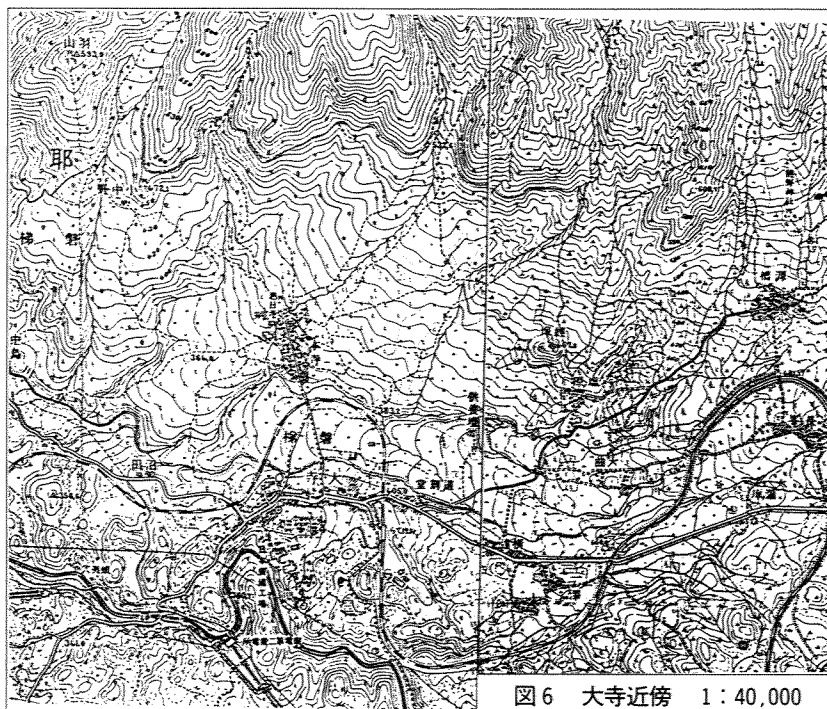


図6 大寺近傍 1:40,000

地理調査所 明治34年測量 昭和6年修正測図 25000分の1
地形図 新潟三号 喜多方ノ二 広田 福島十五号 磐梯山ノ一 猪苗代

から、福島県内では最も古い絵図で、僅少な中世の史料の補足として貴重である。

- (2) 現存の絵図は享保7年表具する際に、縦横それぞれ若干を切り詰めた。損傷も甚だしく、一部の注記も摩滅あるいは判読不能となった。その一部を旧記を利用して補足した(図1)。
- (3) この絵図は磐梯山恵日寺の境内を中心に、一見絵画的に図示しているが、仏堂は正面図、社殿は鳥瞰図式、遺跡・道及び河川等は平面図で表示している。即ち地物を記号化して図示しているから典型的な境域図の類型の古地図である。それ故仏画でないが、何を目的として作成したのかは今後の課題である。あるいはこの寺の存続にかかわる事態に関係があるのでなかろうか。因みにこの絵図は平成5年度福島県重文に指定された。

附記 本稿を整理するに際し、恵日寺住職伊藤泰雄氏からは、同寺寺宝閲覧の便宜を与えられ、

種々御教示も戴いた。また絵絹・絵具・描写筆致等の面から有賀祥隆氏の貴重な御教示を受け、取材に際しては、尾形秀重・五十嵐勇作・矢内誠也各氏、慧日寺資料館の皆様の御協力を得た。ここに厚く謝意を表する。

(1994年7月11日受理)

注

- (1) 恵日寺縁起・略縁起 会津資料叢書二
- (2) 地志扁集大寺村 磐梯町史近世資料1 4頁
- (3) 銅印 集古十種所載 福島県史6 写真1107号
- (4) 会津旧事雑考 福島県史料集成四
- (5) 異本塔寺長帳 会津坂下町史III 歴史編所集
- (6) 庄司吉之助編 会津風土記・風俗帳巻一
- (7) 磐梯山金剛院恵日寺絵図 慧日寺資料館寄託
- (8) 実質記録 磐梯町史資料編IV 98頁～
- (9) 石田茂作 磐梯山恵日寺探訪 古美術6ノ1
- (10) 栗田元次 古版地図集成 昭7, 博多成象堂
- (11) 大宰府観世音寺絵図 多賀城と古代東北 56頁
- (12) 徳一墓 古寺院取調書 磐梯町史資料編IV, 277頁
- (13) 恵日寺書上写 (12)と同書 81頁
- (14) 猪苗代領大寺村山境改 磐梯町史資料編II 110
- (15) 安田初雄 飯野八幡宮絵図とその歴史地理的意義 福島大学教育学部論集45, 1頁～
- (16) 乱入在所 磐梯町史 219頁
- (17) 景兼寄進状 会津四家合考 661頁外
- (18) 畠山・吉良吹拳状 福島県史7 783頁
- (19) ゑかく讓状 前同書 784頁
- (20) 示現寺への盛政寄進状 前同書 784頁
- (21) 一揆連判状 前同書 450頁
- (22) 佐藤昭夫 徳一と恵日寺 会津若松市史1 99頁
- (23) 盛政寄進状 (18)と同書 818頁
- (24) 盛政讓状 前同書 549頁
- (25) 漆紙文書 宮城県多賀城跡調査研究所資料I
- (26) 鈴木貞夫 福島の歴史地理研究 143頁～

(平成6年7月11日)

A Historico-geographical Study on the “*Kenpon-chakushoku-Enichiji-Ezu*”

Hatsuo YASUTA

- (1) *Kenpon-chakushoku-Enichiji-Ezu* was made at the beginning of the Muromachi Era, and it is a valuable Ezu because it is the oldest Ezu in Aizu district, and useful as one of a few historical materials of mediaval age.
- (2) There are so many grand halls of Buddhism and Shinto shrines in the precincts of Enichiji on the Ezu, that it seems to me that the Ezu retains traces of the glory of the most flourishing days of Enichiji.
- (3) The directions of these main halls of Buddhism show some declinations of terrestrial magnetism in the late Heian Era.
- (4) This Ezu is not a mandara, but a kind of map, japanease old map in early times before the beginning of the Meiji era, and it is one of the future subjects to make clear what was the aim of making the Ezu.